

## 『巴里籠城日誌』校訂現代語訳 (2)

松井道昭・横堀恵一

『巴里籠城日誌』旧名「法普戦争誌略」

渡正元 著

巻の2

西暦1870年8月27日<sup>1</sup> (和暦明治3年庚午8月1日)

8月27日付モンメディからの報告にある8月25日付ヴェルダン<sup>2</sup>郡長からの内務大臣宛報告<sup>3</sup>による。昨24日朝9時、ザクセン侯 (普王の兄弟である)<sup>4</sup>指揮下の8千から1万人の普軍がヴェルダンを攻撃した。その内、約4千人が歩兵と砲兵であった。特に激烈な戦いが3時間続き、3百発の砲弾をこの市街に発射した。その後、我が砲兵隊が普軍に大きな損害を与え、全線で退却させた。敵の損失が甚大であった。常駐国民衛兵が大部分使用した、我が砲門が多く敵兵を倒した。この日の戦いで味方に5名の死者、12名の負傷者が出た。敵は、司教区の救急車に発砲し、奉仕の2名が亡くなり、3人目が負傷した。当市の市民は、愛国心と雄々しい力を持つ。

普軍、今日新たに15万人をパリへの襲撃兵として出した<sup>5</sup>。

今日、ストラスブールを囲んだ普兵は、4万人であった。フランスの司令官バゼイヌ及びマクマオンの2将は、配下の軍2隊を、派遣し、当市を救った<sup>6</sup>。

1 パリは、晴。

2 ムース県の郡都である。

3 28日付官報。

4 正元による注である。しかし、ザクセン王太子アルブレヒトは、普国王の兄弟ではなく、8月19日新たに編成されたマース軍団司令官としてヴェルダンの戦いに参加した。

5 出典未確認。

6 出典未確認。

8月28日<sup>7</sup>

8月28日付パリ総督トロシュウ將軍の市内への命令<sup>8</sup>。

出生時に、現在、仏国と戦ういずれかの諸国に属し、仏国に帰化していない者は、皆、3日間の内にパリ及びセイヌ県から立ち退き、さらに仏国から去るか、ロワール川の向こうの県に退かねばならない。パリ総督からの特別滞在許可証<sup>9</sup>なしに上記禁止に背く者は、逮捕され、法により裁かれるため、軍事法廷に送られる。

8月29日<sup>10</sup>

シュレスタット郡長から過去2日間、ストラズブールに対し、激しい砲撃があった旨内務大臣に報告<sup>11</sup>した。

メジエールのティオンヴィル広場には、普軍が鉄道線路を断ち切る前に、十分な量の食糧や弾薬が運び込まれた。また、今日、ティオンヴィル近辺での小競り合いで敵兵18名を討ち取り、味方が3名しか戦死しなかった<sup>12</sup>。今日、私がパリ周囲の砲台を、巡回したところ、守備の用意が既に整っていた。その堅固さと広大さが、実に目を驚かせた。これを撃破するには数十万人の兵が必要だろうと思う。

8月30日<sup>13</sup>

パリ総督からの市中への掲示<sup>14</sup>。

軍務大臣の命令で諸地方からパリの防衛を支援する遊動国民衛兵が十万人召集される。パリ総督は、この兵士たちの素晴らしい気持ちと献身に応え、手厚くもてなすようパリ市民の愛国心に訴える。しかし、その負担と不便を軽くするため、パリ総督は、産業事業所長や家屋の持主

7 パリは、晴。

8 29日付官報。

9 申請手続きが8月30日警視庁告示で出された(8月31日付官報)。

10 パリは、曇。

11 8月30日付官報。

12 31日付 le Petit journal

13 パリは、晴。

14 9月1日付官報

に、できるだけ早く、無償で提供できる建物等を、種類を問わず、定めて申し出るようお願いする。

8月31日<sup>15</sup>

この日の戦闘は、もっとも激烈であり、普將軍の引率した2万4千人の兵隊が一戦で、多く戦死し、残った兵を点検したところ、僅か180人余りであった<sup>16</sup>。この日の戦い。双方の軍隊ともに、戦死が多く30日間のうち、この日の戦死が最も多かった。これから仏軍の死傷もまた推察され、戦闘状態が猛烈だったこともまた想像できる。

今日、カールスバード<sup>17</sup>からの通報<sup>18</sup>による。昨今、当所の鉄道線路から普軍を蒸気機関車70両に各80両の客車を連結し、各客車に38人運ぶという。この人員が212,800人となる。そして、各客車の上に、パリ襲撃のため至急輸送する、と大きく書いてある。これは、全く普軍の仏国を恐れさせようとの計略なのだろう。

パリ城内<sup>19</sup>の諸国民衛兵の調査書に、今、44万人の遊動隊がいると記す<sup>20</sup>。ただし、仏国の国民衛兵隊に2種類あり、その一つを遊動隊といい、戦争が本務の国民衛兵隊である。また、もう一つを常駐国民衛兵隊といい、市内警備隊である。

9月1日<sup>21</sup> (和暦8月6日)

白国からの通報で、一昨日、30日、マクマオン仏軍司令官は、朝8時から夕8時まで、12時間、戦い、黄昏にムース河をまた渡り、引上げた。この時、仏軍が始め退却し、その後盛り返した。しかし、かなりの損失を被っ

<sup>15</sup> パリは、晴。

<sup>16</sup> 出典未確認。

<sup>17</sup> ドイツ・バーデン州、仏独国境付近にある。

<sup>18</sup> 出典未確認。

<sup>19</sup> 当時、パリは周囲を城壁で囲まれていた。

<sup>20</sup> 9月1日付 le Petit journal が引用するオスマンとフォルカドの報告として、仏国全体の兵力として、遊動国民衛兵 466,000 人、追加召集 48,000 人、正規軍 700,000 人の計 1,204,000 人を挙げ、さらに、1870 年及び 1871 年の徴兵で 230,000 人が加わるとしている。

<sup>21</sup> パリは、晴。

た。また、仏海軍歩兵が奇跡的で巧妙な活躍をしたという。翌31日、朝7時から普軍が攻撃し始めたが、マクマオン司令官によるスタン城からの砲撃で普軍は、非常に大きな損害を被り、12時に撤退したという<sup>22</sup>。

この両日の死傷が未だ詳らかになっていない<sup>23</sup>。

新聞の附録<sup>24</sup>によれば、今、国土の危急に臨み、その恩義を顧みず、土地家屋を捨て、逃げ去り、他人にその危険な仕事を任せ、それどころか、自分の家屋を他人に守らせる者が多い。どのような法律により、これを止めるべきか。もっとも、婦女老幼の者がたとえ、戦いを避けても、あえて問題にはできない。男子に至っては、身命を投げ打ち、よろしく国への恩義に報いることが当然であるのに、富裕者は、その蓄財のため、このことを忘れ、恥を忍び、逃げる者が多く、貧しい者だけが逃げられず、逆に、防衛にその身を捧げている。この両方には、処置すべき良い方法が必ずあるだろう。現在の危急に臨み、家屋を捨て去る者は、その家屋を戦士の利用に提供し、そして、負傷の兵隊に貸し与えるべきである。

ヴェルサイユ市長の市を離れる者への通告は、次のとおり<sup>25</sup>。

ヴェルサイユに普段住む者からの旅券申請が通常より多いが、不在を理由に軍の宿泊費その他の住民の負担を免除できないので、不在となる者は、その住居の鍵をその家屋の門番又は最も近くの隣人に預け、当局との連絡の代理人とすること。鍵がかかった門は、その者の負担で開けられることになる。

パリ市も同じやり方で同じ命令を出せば良い。今、この危難に臨み、身命を投げ打ち、国家に殉ずる者は、真の兵士であるので、よろしくこの者たちを尊重するのが良い。そこで、どうして脱走した連中の家屋を没収し、兵隊に提供できないのだろうか。先頃パリ市の防御を申し出た国民衛兵を皆、この家屋に陣をとり、宿泊させるのが良い。この期に臨み、逃げよう

<sup>22</sup> 以上2日付官報。

<sup>23</sup> 正元の意見である。

<sup>24</sup> 出典未確認。

<sup>25</sup> 9月2日付 le Petit journal は、壁への張り紙としている。

と思う者は、速やかに逃げれば良い。ただし、その家屋は全て、報国の兵士に提供するのが良い。考えると、今、パリ市は、防衛の勢いが高まり、富裕者はその金を持ち、危難を避け、遠く他の国へ移った。しかし、諸都市からパリの警衛防衛のため、国民衛兵が出た。その方向がお互いに食い違った。これが、このような主張の起る理由である。

9月2日<sup>26</sup>

立法院別局<sup>27</sup>中でパリカオ軍務大臣は、諸議員に言った<sup>28</sup>。

最近、政府が敵の報告書を入手した。恐らくは、謀略だろうと思う。その理由は、この度、独軍がナンシーに侵入し、直ちに電信局を奪い、パリに偽の電報を送ったという。そうなると、私は、この報告の真偽がまだ分らない。そこで、今日2名の捜査員を出したが、その報告を得ていない。

政府が最近得た電報の大略は、次のとおり。

- 1 ストラスプールのユーリック司令官から、その要塞に危機が切迫し、落城が朝夕に迫るとの至急電がある。ユーリック将軍が先に政府に対し、ストラスプールの境界の砦の地であり、守らねばならず、私が籠城中、1弾丸と1兵士でも、私の眼下にある内は、決して要塞を敵に渡さない、と誓った。そこで、この電報は、必ず敵の偽りと推察される。
- 2 ベルフォール（国境である<sup>29</sup>）に在陣のドゥエイ将軍に、パリの司令部から電信で、急ぎその隊を引き上げ、列車でパリに帰れと伝えた。このため、ドゥエイ将軍が直ちにその兵をまとめ、先陣を列車に乗せ、数里を走った後、機関士が直ぐこの線路が断絶していることを見つけ、直ちに、その車を後方に向け、漸くこの危難を避け、元の陣地ベルフォールに引き返した。これは、全く敵の計略であり、ドゥエイ将軍を欺き、鉄道線路に落とし、殺害するためである。そ

<sup>26</sup> パリは、晴。

<sup>27</sup> 原文のまま。非公開の会議又は委員会を指すと思われる。

<sup>28</sup> 出典未確認。

<sup>29</sup> 正元の注である。

の危険を見出し、難を免れたのは、実に天の恵みというべきだ。

昨日朝、マクマオンの軍が普軍と戦い、夕方になった。このとき、普王太子は、新手の大軍を率い、敵中に走り回り、大いに仏軍を破った。マクマオンが少し傷を負った。この3日間の連戦で、マクマオン司令官の仏軍は、普兵を9万人討ち取ったという<sup>30</sup>。

昨日、普軍から軍使をマクマオンの陣に送り、最近の死傷者の収容のため、24時間の休戦を申し入れた。しかし、マクマオンは、これを許さず、直ちに拒否の旨を答え、使者を追い帰したという<sup>31</sup>。

私は、今日、仏国人に、「私が今の戦争の状態を見聞すると、普軍が次々に進入し、既に大軍がパリ周囲の諸市を蹂躪している。その勢いは、いつか当市を攻撃するだろう。そこで皇帝がこの城に入り、防衛の指揮をとらないのか。」と聞いた。なぜなら、ナポレオンは皇帝である。本来、城中にいて指揮すべきである。しかし、パリ市民が帝を酷く憎み、罵る。そこで、敢えて、質問した。

彼が答える。ナポレオンがパリに帰れば、必ず民衆に直ちに殺されるだろう。その理由は、今度の戦争が元来、帝の考えであり、勝敗の見込が違い、軍が敗れ、人が多く死んだ。その上、首府に敵軍が迫り、仏国が危くなったのは、全て帝の仕業で、民衆が深く恨む。そこで、今、帝が帰城すれば、ほとんど確実に殺される。

私は、また聞いた。勝敗は戦争につきもので、帝のみの罪とは言えない。今日の危機でこのことを論じている暇があるのか。特に、ナポレオンは、仏帝である。当然、全国民が彼を尊く崇め、民衆が皆、心を合わせ、協力し、防戦すべきだ。今日の緊急時に、なぜ自国の帝を拒み、憎むのか。

彼の答は、今、仏全国の恨みが既に彼に向き、救いようがない。

今日、パリ市内の庶民の有様は、既にこの様である。後日の参考のため、今、ここにこれを書いておく。

---

<sup>30</sup> 出典未確認。

<sup>31</sup> 出典未確認。

9月3日<sup>32</sup>

私がベルリン市の新聞<sup>33</sup>を見ると、8月18日から27日までの10日間の普軍の死傷者が次のとおりである。

8月18日11,037名、同18日から25日まで42,308名、ストラスブール要塞で11,505名、ファルスブールで 5,308名、ヴェルダンで1,385名、トゥールの戦いで3,307名、クーセルの戦いで13,908名、ビュザンシー、ヴィトリー、ムーランとプーイーの戦いで5,714名、27日の戦いで11,209名、コルフラレリー<sup>34</sup>の戦いで1,400名、また、この10日間陣中病死12,500名、総計119,581名と記録されている。

メジェールから電信の通報による。普軍30余万人の大軍がメッスでバゼイヌ将軍の仏軍と戦ったが、バゼイヌの軍が、ついにメッスの要塞内に引き上げた<sup>35</sup>。昨2日、また、トゥールとスダンの間で普軍がマクマオン司令官の仏軍と朝5時から終日、砲戦し、その砲声がまるで雷のように天地を振動させた<sup>36</sup>。

9月4日<sup>37</sup>

スダン要塞陥落、帝、捕虜となり、フランスが共和制度となる (9月3日)。今朝 (9月4日)、発表の閣僚会議の仏国民宛宣言<sup>38</sup>。

仏国民よ、大不幸が我が国を襲った。3日間にわたるマクマオン元帥の軍による30万人の敵軍に対する英雄的抗戦の末、4万人が虜になった。重傷を負った、マクマオン元帥に代わったヴァンファン将軍が降伏に署名した。皇帝も虜となった (スダン要塞が落城し、仏兵4万人が敵の捕虜となり、ナポレオンも捕虜となった。すなわち、パリ市防戦の時とな

<sup>32</sup> パリは、晴。

<sup>33</sup> 出典未確認。

<sup>34</sup> 原文のまま。

<sup>35</sup> 5日付 le Gaulois は、バゼイヌ軍がフリードリヒ・カール軍と戦ったとのみ報道。

<sup>36</sup> 出典未確認。

<sup>37</sup> 日曜日であり、パリは、晴。

<sup>38</sup> 9月4日付官報 (帝政最後の官報) 冒頭記載の宣言文。

り、全国の人民、心を合わせ、協力し、自主自立に永く努力しなければならぬ<sup>39)</sup>。政府は、公権力と同意し、事態の深刻化への全ての処置をとる。

この3日間の戦闘は、近年、欧州に稀な大戦闘であり、仏軍の死傷者捕虜は、約15万人に上るといふ。

マクマオン元帥は、仏国の左翼の総司令官であり、名高い老練の元帥であるが、右翼のバゼイヌ総司令官と協議し、2軍に分かれ、仏軍の指揮は、皆この2司令官の雄大な計略に従った。マクマオンは、今62歳、昨日激戦の際、砲弾のため、右腰を砕かれたといふ。しかし、いまだ死ぬことなく、民衆が皆これに驚嘆した。

1870年9月4日夕6時付レオン・ガンベッタ内務大臣から知事等宛政治体制変革の通達<sup>40)</sup>。

立法院において、廢位が宣告された。

市庁舎において共和国が宣言された。

以下の11名の全員がパリ選出の立法院議員により構成される国防政府が組織され、市民の歡呼により承認された。

アラゴ、クレミュー、ファーヴル、フェリー、ガンベッタ、ガルニエ・パジェス、グレ・ビゾワン、ペルタン、ピカール、ロシュフォー、シモン

トロシュウ将軍は、パリ防衛の全軍事権を委ねられ、政府の大統領に任命された<sup>41)</sup>。

本宣言を直ちに張り出し、必要あれば広報人により公知させよ。

共和の制度になり、新しく選ばれた諸大臣が10名いる<sup>42)</sup>。その順序が、次のとおりである。

大統領兼パリ市総督 トロシュウ将軍、副大統領兼外務大臣 ジュール・

<sup>39)</sup> 正元の感想である。

<sup>40)</sup> 9月5日付官報。

<sup>41)</sup> 正確には、行政府の長といふべきであるが、大統領と訳した。

<sup>42)</sup> 上記官報。



ファーヴル、内務大臣 ガンベッタ、軍務大臣 ル・フロー将軍、海軍大臣 フリシヨン提督、法務大臣 クレミュー、財務大臣 エルネスト・ピカール、教育文化美術大臣 ジュール・シモン、公共事業大臣 ドリアン、農務通商大臣 マニャン  
パリ市 (警視総監) ケラトリー<sup>43</sup>、(市長) アラゴ<sup>44</sup>

今日、私は、知人であるレスピオー歩兵中佐 (この人は、去る8月6日の戦いで太腿に弾丸を受け、治療のため、市に戻る。この人は出陣時、歩兵少佐であったが、この度、昇進した。私と同宿なので、日々親しく話す) に次のように聞いた。

この度、仏軍が大いに敗れ、左翼司令官のマクマオンが負傷し、数万人の死傷者を出し、4万人の兵が皆捕虜となり、ナポレオンもついに捕虜になった。そこで、仏国が、政治体制を変え、新たに共和制度を打ち立てたと発表した。私が考えると、国は、1日もその主を欠けない。従って、今日立てた共和制度は、帝の捕虜中に仮に設けたとし、この戦争が終わった後、帝が帰れば、必ず以前のように帝位を置き、君主制の政治体制に戻すべきだろう。それならば、今、新たに共和制度を置かなくとも、太子がすでに軍中にある。幼年であるが、いずれ帝位に登るよう国の制度が既に定まった。しかし、何故、今共和制度を布くのだろうか (今年5月21日、ナポレオンの死後、太子が帝位を継ぐ旨の上院決議の国民投票による承認が発表され、制度を固めた<sup>45</sup>)。

彼が答えた。今日の共和制度を、仮にも非難できない。ナポレオンは、再びこの国に入れない。

また聞いた。その理由が何か。後日、この勝敗の決着が付き、普国がナ

<sup>43</sup> 5日付官報掲載の警視総監告示。

<sup>44</sup> 5日付官報。

<sup>45</sup> 5月21日、立法院長が4月20日付上院決議を5月8日の国民投票で承認した旨 (賛成7,350,142票、反対1,538,825票、無効112,975票) 発表した (5月22日付官報)。これにより、帝位は、ナポレオン3世 (子がない時はその兄弟) の男系子孫が帝位を継承し、長男を皇太子とすることとした。

ポレオンを送り返すと民衆がどうするのか。

また答えた。仏国人は、ナポレオンが再び国内に入ることを認めない。その理由は、今度の戦争は全て帝が好み、起こしたことにある。ところが、その策が成功せず、その戦争指導も拙く、その軍が敗れ、数多くの兵士を失い、子弟を殺した。民衆がこれを恨み、憎み、その罪をまことに許せない。そこで、今、仏国では、ナポレオンの帝位を剥ぎ、彼を捨てた。彼は、今日は、1人の兵士、1人の男に過ぎない。たとえ普国が許し、解放しても、仏国に関りはない。彼が他国に居住すべきだ。」であった。

更に聞いた。そもそも軍の勝敗は時の運であり、英雄でもどうしようもない。仏兵が当然勇敢であるが、連日報告の敗戦は、仏国の不運不幸というべきだ。また、帝から指揮号令が出るのは、その国の主である者の任務であるからだ。今度の敗北を必ずしも帝の罪といえない。果たして時の運ではないか。そうならば、その臣民として、帝を拒み、その上、捕虜となったのを棄て、彼を助けず、逆にその機会に乗じ、彼を追放する理由があるのか。

彼が答える。仏国民が2派に分かれていた。一方が帝を憎み、他方が帝を助けた。しかし、今や2派が一緒に帝を恨み、罵る。その声が市街に満ち溢れ、万民の心が背く極みは、どうしようもない。

私が考えると、今度の普仏戦争の原因が当然一朝一夕のことではない。普国が対仏戦争を企ててから、既に久しい。普国が1866年、奥国に勝ち、土地を広げ、軍の威力を振るい、翼を四方に伸ばすような勢いがほとんど、欧州を飲み込むほどである。その上、仏国への長年の恨みが深く、既に何年もその兵力を競ってきた。帝がこれを避けても、帝が既に高齢となり、さらに昨年来、国内には難しい問題が起り、この春漸くこれを鎮めるところだ。また、人民の気持ちが太平の世に飽き、兵士の訓練が元来十分であり、武器庫や穀物の倉も充ちていた。国の内外で機会がこの時しかないと奮起したのだろう。しかし、計略が失敗し、その軍が敗れ、勝利の風が多く、普軍の上に生じ、仏軍がこのため、吹き抑えられ、ついに今日に至っ

た。そして、パリ市民がまるで仇のように帝を見るのは、帝の不幸といえる。帝は、捕虜となり、国民が見捨て、助けず、ついに仏帝の位を去った。ああ、帝は、自らの知恵と勇気により自立し、仏皇帝の位に登り、外では、度々、隣国と戦争し、軍の強さを遠方にも示し、内では、政権を掌中に握り、全国を情により治め、既に18年間、その威名を欧州に震わせたが、その晩年に至り、威名が全く地に堕ちた。惜しいことである。

また、私が内心想うと、今、文明開化し、強く、富むのは、欧州各国、特に、英仏普3国が恐らく世界の先頭と言ってよい。しかし、その様子を観察すると、その人心が粗雑、軽薄で、節操が全くないに近い。我が日本の魂では、もし国の帝が敵の虜となれば、全国民が憤り、その身を忘れ、仇に報いる。ところが、文明の開化が極まれば、人心がこのようにその節操を失う。思えば、これが当然、生ずる弊害なのだろう。今や、欧州各国の開化が実に完全であるが、あえて、嘆かましいのは、ただこの節操を養成できないという弊害だ。しかし、我が国では、この節操のみを最も尊ぶ。人心が開化の地に限り、軽薄で節操に疎いのは、世界で皆同じである。その国で教育にあたる時は、よくこの点に注意しなければならない。

私は、今日、パリ城郭周囲に設置された砲台を巡回した。帰路、立法院に行き、その議論を聴こうとすると、共和政治の下での公職選挙の件が議題のため、何十万人か分からない群衆が周囲にいた。しかもその門前には騎兵歩兵の2兵で警備し、全く人を近づけない。私もまた近づけず、遠く立法院の様子を眺めるだけであった。それから、王宮内に入り、その様子を見ると、廢位された帝の皇后が城から今日、退去するのを見物しようと数万人の群衆がいた。皇后の退去が今日ではないということで、皆、帰った。

それから市街に出ると道路に数百人の群衆が共和政と書いた大きな旗を押し立て、大声で共和政を祝う歌を唄い、帝を棄てたことを祝い、行進していた。なかでも、最も酷いのは、このところ編成された国民衛兵隊が市中を巡回する中で、1、2小隊が小銃の先に木の葉や草花を付け、声を揃え、勝手気ままに歩き回っていた。その意識が憐れむべき、また笑うべきものだ。

また、一つの奇妙なことを見た。パリ市中では、家毎に帝の顔形を金色の生地で作り、これをその門にかけ、飾る。しかし、今は、急に、これを全て破り碎き、粉々にし、人々が口を揃え、笑い、祝っている。その勢いがこのようであった。また、道路を通行する者皆が共和政を祝い、お互いに喜び合う声が、まさに家に溢れ、通りに満ち、ほとんど市街を動かした。人心の乖離がこのとおりであり、また、その仕草が狂人と同じである。他人がこれを見ると、その様子や仕草が実に憎らしい。ナポレオンは、昨日まで仏の帝であった。民衆は、既に18年間、その恩恵に浴してきたが、今、敵の捕虜となったのを知り、これを棄てるだけでなく、逆にこれを祝い、急に門飾りの帝の肖像までも破砕し、その仕草がまるで狂人のようであり、その意識がまるで仇敵を見るようだ。人心の離反がここに至るが、その国民の心情は、敵国に対し、少しも恥じる気配がないようだ。全く嘆き、悲しまないではいられない。

9月5日<sup>46</sup>

9月5日付ガンベッタ内務大臣の国民衛兵の選挙に関する発表<sup>47</sup>。

共和制が宣言された。パリは危機にある。新政府は、一つの国防政府である。

パリ国民衛兵、即ち、選挙人名簿に記載の選挙権者は、来る6日12時、それぞれの区役所で士官と下士官の指名の選挙を行う。

今日、私が戦況報告を見て確かめると、去る3日、ナポレオン帝が普軍に捕虜となった時、ナポレオンはルブリュン及びフェリクス ドゥエイの2将軍と4万人の兵とともに、スダン要塞に立て籠っていた。そして、独国の大軍が連日、非常に激しく、この周囲を攻撃し、城内から休戦の白旗を立てた。独軍がこれを見て、その砲門を閉じ、城内へ1名の使者を送り、今、ナポレオン帝がその将校や兵士とともに我が軍と血戦し、雌雄を決するか、または速やかに開城し、捕虜となるか、のいずれかを、今から24

---

<sup>46</sup> パリは、晴。

<sup>47</sup> 5日付官報。

時間（すなわち我が国でいう1昼夜である）以内に答えるよう伝えた。その夕7時、ナポレオン自ら、私は、軍の先頭で戦死できず、私の剣を差し上げると述べた1文書をヴィルヘルム普王に送った<sup>48</sup>。この文書が普軍の本陣に届くと、普王が直ちにその返事を送った。その文には、帝は、今、軍中の指揮を司らず、その剣を差し出す理由がなく、今、その身を差し出し、捕虜となるようであった。翌朝7時、ナポレオンがその2将及び数万人の兵隊とともに、普王の本陣に赴き、一緒に捕虜となったという。以下省略する。

9月2日夕6時30分<sup>49</sup>、普王がスダンの前面の陣地から王妃に送った電報（今日、普国のベルリンからの通報）<sup>50</sup>による。今、全仏軍が戦争捕虜となるとの降伏文書が負傷した総司令官マクマオンと交代したド・ヴァンファン將軍との間で結ばれた。ナポレオン帝は、軍を指揮せず、全てをパリの摂政皇后に譲ったので、1人で降伏した。直ちに行われるナポレオン皇帝との面会後に、彼の居所を決める。

昨4日朝 レセップス氏<sup>51</sup>（皇后の親族である<sup>52</sup>）がチュイレリー宮殿に行き、皇后に謁見し、皇后退位の文書を差し出した。皇后がこれに署名し、その文書を渡した<sup>53</sup>。今日午後1時半、皇后は1台の馬車に乗り、1名の侍女と2名の下男と城内を出、夕7時、ベルギーの首都に到着したという。

噂では、今日皇后退去の前、2、3人の市民がこの館の中に入り、その状態をみようとした。この時、皇后の侍女が制し、皇后が出立する用意ができるよう今半時間の猶予を欲しいと頼んだ。半時間後、皇后は、馬車に

<sup>48</sup> 5日付 le Gaulois は、ブリュッセル発の報道としてこの文を掲載する一方、ナポレオンが書いたのは、「軍の指揮をしておらず、また、私の権限を摂政皇后の手に委ねたので、私の剣を普王に捧げる。」という文であったともしている。

<sup>49</sup> 5日付 le Siècle は、原文どおり、1時22分としているが、夕刻とあるので、le Temps 記事に従い、6時半とした。

<sup>50</sup> 4日及び5日付 le Temps、5日付 le Siècle

<sup>51</sup> スエズ運河建設で著名である。

<sup>52</sup> レセップスの母がスペイン出身、ユージェニー皇后の母の伯母であった。

<sup>53</sup> 5日付 le Temps 同記事では、閣僚全員は、ユージェニーが署名すべきでなかったとした。

乗り、王城を退去した。昨日まで仮にも仏国の政務を預かっていたが、退城の有様は憐れむべきであった。

今日、パリ伯（仏王ルイ・フィリップの孫である。以前ナポレオンが帝位に登った時、他国に追放された）、ルイ・ブラン、ヴィクトル・ユゴー等の人々が急にパリに帰った<sup>54</sup>。以前ナポレオンが帝位に登った時、この者達を追放し、国に入れなかった。最近これを許し、帰国を命じても、帰らなかったが、今度、共和政治になり、皆帰ってきた。この者達は、皆ナポレオンに宿怨がある。

9月6日<sup>55</sup>

市中へ発表<sup>56</sup>。

政府は、職務の序列を以下のとおり、定める。

大統領 トロシュウ将軍、副大統領 ジュール・ファーヴル、官房長官 ジュール・フェリー

政府は、職務の補助のため、以下の通り任命する。

官房副長官アンドレ ラヴェルテュジョン、エロルト

閣僚一同署名の国防政府令で、武器の製造、取引及び販売は完全に自由である旨定める<sup>57</sup>。

エティアンヌ・アラゴ<sup>58</sup>がパリ市長に任命され、フロッケ、ブリソンがその助役になる<sup>59</sup>。

今回の改革で立法院を解散し、上院を廃止する<sup>60</sup>。

国務院長省を廃する。ステーナッケル氏を電信局長に任じる<sup>61</sup>。

54 6日付 *le Temps* がユゴーとブランのパリへの帰還を報じている。

55 パリは、朝にわか雨、後曇。

56 9月5日付官報。

57 9月5日付官報掲載。

58 エマニュエル・アラゴの叔父（郵便庁長官）。

59 9月5日付官報。

60 9月5日付官報掲載国防政府令。

61 9月5日付官報。4日の項記載の閣僚任命の末尾に記載されている。

9月4日付警視總監のパリ住民宛発表<sup>62</sup>。

18年待ち、厳しい必然性という打撃のお陰で、ついに中断された伝統が戻った。多数派の代議士が去り、左翼の代議士が廃位を宣言し、その後、共和国がパリ市庁舎で歓呼された。成就した革命は、平和的であり、戦場で仏国人の血が流れなかった。革命は、1792年と同様、外国人を追い出すことが目的である。パリ市民は、パリと仏国のため、冷静、勇敢な態度で、課せられた任務の高さを示す必要がある。私は、パリ市民に、仏国と世界に、賢明さと節度でパリ市民が真に自由に値することを示すよう、取り戻したその政治的権利を使うようお願いする。現在の状況下で、皆に対する我らの義務は、祖国が危機にあることを思い出すことである。共和政の自由の庇護の下、仏国が勝つか、死ぬかの分かれ道にある今、私は、祖国を裏切る者の陰謀から皆を守ることにだけ、私の力を用いることを確約する。

今般の改革でパリ市街の巡査を全て廃止する<sup>63</sup>（この隊は、市中取締り、非常の予備、往来の案内と路上の争いを処理し、悪者、盗賊等を捕えるため、昼夜、1町の間におよそ1、2人も巡回している。つまり英国のポリスマンに等しい。この巡査の人数が26,000人で1人当たり1日の給料3フラン半から4フランだという）。

9月7日<sup>64</sup>

昨日、ファーヴル外務大臣からパリ駐在の各国大使に文書を送った<sup>65</sup>。その大略は、ただ今、我が国の政治体制を一新し、共和制度とした。今後、厚い信義による交際をよろしくお願いしたい。仏国民は、あえて戦いを好むのではない。この戦争は、全て先帝ナポレオンが在位時の権限で起し、そのまま、今日に至った。もし今両国間で和平しても、我が領土を割けな

---

<sup>62</sup> 9月5日付官報。

<sup>63</sup> 8日付官報掲載パリ警視總監命令。人身と財産の保護の任務は、旧軍人からなる公安維持官に代えられた。

<sup>64</sup> パリは、朝小雨ながら晴、後曇。

<sup>65</sup> 7日付官報に外務大臣から在外の外交官宛通達に同趣旨の記載がある。

い。また、賠償金を出せない。全国土が焦土となるまで防戦するつもりだ、等々とある。

出征中の軍司令官ヴィノワ将軍が昨夕4時、諸軍隊を引き連れ、パリに帰り、13両の列車に砲兵、11両の列車に騎兵、14両の列車に歩兵を乗せてきた<sup>66</sup>。その数が非常に多いことは、推察できる。

昨日、パリ城内の武器庫から百万丁のシャスポー銃を出し、諸兵に分配したという<sup>67</sup>。

軍務大臣だったル・バフ元帥の計算が粗雑という（開戦当初ライン軍総参謀長として指揮に当たった<sup>68</sup>）。以前、7月中旬、立法院での開戦か否かの会議で、諸議員がこの軍務大臣に対し、今、仏国が戦争を始めれば、その軍備は、長い戦いに十分かを聞いた。このとき、ル・バフ元帥は、軍備が充実し、たとえ約2年間戦い続けても、ゲートル（巻脚絆）のボタン1個すら買う必要もないと答えた<sup>69</sup>。そこで、立法院が開戦を決定した。しかし、戦争がまだ2か月も経たないのに、諸装備が大いに欠け、特に大小の銃が少なく、選り集めた市民、農民出身の兵に渡す兵器がない。ル・バフ元帥の粗雑な計算がまさに仏国の敗北を招いたというべきだろう<sup>70</sup>。

今日、新聞に1つの解説<sup>71</sup>があった。もし両国の和平の議論があれば、普国から次の箇条をその賠償に望むだろうと。

- 1 アルザス及びロレーヌの2地方（仏独境界にあり、以前1667年、仏王ルイ14世の時代に独国<sup>72</sup>から略奪した土地である。2県とも堅固な城を築き、要害の地（持つと役に立ち、相手方に害となる土地）

---

<sup>66</sup> 6日付官報。

<sup>67</sup> 出典未確認。

<sup>68</sup> 当時メッス降伏で捕虜であった。

<sup>69</sup> 7月15日立法院での発言。

<sup>70</sup> 7日付 le Petit journal は、ル・バフ元帥が敵に殺されなければ、軍法会議にかけられるべきだとの主張を掲載している。

<sup>71</sup> 出典不明であるが、7日付 le Petit journal は、アルザス、ロレーヌの割譲、海軍の譲渡、敗戦の賠償金支払のいずれにも反対との意見を表明しているため、このような観測があったことは裏付けられる。



として最も優れている)。

- 2 50億フランの賠償金。
- 3 仏海軍の半分を分けること。

この3カ条を約束できないと普国が和平しないという。

去る3日 スダン要塞での大戦闘のとき、仏軍の兵が20万人、普軍は30万人であった。そして当日落城のとき、普軍が奪った大砲が数百門、その内、ミトラユーズ砲が250門あった。またこの近辺の5つの村が戦火を被ったという。双方の死傷者は十余万人に上るだろう。しかし、詳細な調べではない<sup>73</sup>。

今回パリ市籠城で近隣2、3市から追放の独人が8万人という<sup>74</sup>。

私が内心、状況を考えたが、恐らく現在は、仏国の政治体制の変革の時期ではないだろう。今、両国の軍勢の勝敗や強弱を比較すると、普軍を3分とすれば、仏軍が1分である。そして連日の敗戦で敵がパリ城に迫り、その攻撃が朝夕に迫る。当然、今は、この政治体制を変えてはならない。基礎を固め、心を合わせ協力し、国を守るときである。しかし、近頃、帝が捕虜となってから、忽ち内政を変え、急に共和制にした。恐らく、それは基の木を倒すことと同じだろう。もし今国内で争乱があれば、優れた將軍や勇敢な兵士がいても、どうやって、防衛力を一つにし、悪敵の侵略を防ぐのか。実に危機である。現在の政府の諸大臣等がこれを知らないのではない。しかし、人民が帝を恨むため、騒動が僅かの間起こり、都内の激しい勢いを鎮める時間がなかった。これは時の勢いのせいなのか。考えると、その事態が個人的な恨みから出、従来から共和制を企てるロシュフォール等の徒党がこの機を利用し、状況を顧みず、帝が敵の掌中に墮ちたのを見て、勢いに乗じた仕業であろう。恐らくはまた、いつか変動が起こるだろう。

---

<sup>72</sup> 当時は神聖ローマ帝国。

<sup>73</sup> 出典未確認。

<sup>74</sup> 出典未確認。

9月8日<sup>75</sup>

去る2日スダンの戦闘の事情<sup>76</sup>。

8月31日、スダン要塞の仏司令官マクマオンの軍が12万人、また、フリードリッヒ・カール普太子の軍が30万人であった。このときマクマオンの軍の計略は、メッス要塞に陣取るバゼイヌの軍と協力し、普国の大軍に当ろうとした。31日と9月1日、マクマオンは、スダンの近辺周囲に兵を配置し、要塞に立て籠り、陣を布いた。そして、スダン城前面のマルフェーの森という重要な地に、仏軍が立て籠り、陣を布こうとしたが、全く手遅れとなり、反って敵が立て籠った。実に、マクマオンの失策というべきだ。普将軍がすぐに大軍をこの森に入れ、直ちに70門の大砲を準備し、9月1日、終日スダン城の正面を絶え間なく砲撃し、仏軍が大きく敗れた。実に、この日の戦闘は、欧州に稀な大戦であった。この戦いで仏軍が勝てなかったのは、マクマオン指揮下の仏軍12万人、普軍30万人と、少数が多数に勝てないためだった。この状況で仏軍が数回血戦し、全てスダン要塞に立て籠ると、30万人の普軍がその四方をまるで鉄の桶のように隙がなく囲み、周囲から大砲を撃ち、2日目の終わりには、仏軍が食料に乏しく、また弾薬が既に尽き、兵士が大いに困苦した。

始めは、9月1日朝5時から戦いを始め、11時頃に至り、仏軍の英気が盛んで大いに普軍を破り、その勝利を得ると普軍が度々敗走し、守勢に回り、苦戦した。そして、仏軍が普司令官である王太子の本陣を襲おうとするとき、その傍から約8万人の真っ黒な身なりの普軍が一斉に躍り出て新手の英気で、仏軍の左翼脇側を打ち砕いた。このとき、前に敗けた普兵も一時に盛り返し、仏軍の正面と右翼を襲撃したので、勇敢である仏軍といえども、この両翼と正面を激しく攻撃され、中央の応援の兵が乏しく、ついに全仏軍が引き退き、スダン要塞の城中に立て籠った。普国の大軍は、この市街と砲台の周囲にある砦を全て奪い、厳しく四方を取り囲み、大砲で激

---

<sup>75</sup> パリは、曇。

<sup>76</sup> 出典未確認。

しく攻撃した。

この日、この砲台の周囲から飛来する大砲の弾丸が11時間にその数5千から6千発で、息つく間の途切れもなく、この市街を激しく射撃し、その数時間の後には、城中の仏軍兵士は、全て倒れ、枕を並べ、死ぬような有様であった。数時間の後、城中から白旗を出し、その発砲を止めた。このとき仏軍が1人もこの囲みを逃れられなかった。諸兵士が大いに困窮した。この日の仏軍の死傷者が10万人余りである。その後開城し、諸軍一同が敵の捕虜となった。その数が4万人。このとき普軍が争って城中に入り、仏国の軍旗、大砲、小銃、馬やミトライユーズ（大砲の名）等を全て、略奪した。ナポレオン帝もこのときに出て捕虜となった。また、マクマオン総司令官は、この日戦いの始め、砲弾のために深手を負い、退いていた。また城内の大砲、小銃は破碎して、あちこちに散在し、食料袋や小さな車の類も全て破碎した。大変憐れなのは、城中の馬である。この籠城中500頭の馬が残っていたが、数日間食わず、市中所々に彷徨い、歩き回り、食べ物を探したが、1人もその面倒を見る者がなく、ついに数多くの馬が飢えや渴きのため死んだ。これは真に憐れむべきである。

この度の戦争、普軍、その進退出没の作戦が非常に優っているという。普軍の死傷者は6万人である。

スダン市中の住民達がこの暴乱にあい、皆道に横たわり、悲嘆の涙を流し、泣く声が町に満ちる状態が実に涙を落す他ないという。スダン籠城の最後の一日は、食料のパンが欠乏し、民衆が困窮したという。この度の戦いで仏軍の捕虜の数が8万人前後という。また、失った大小の大砲、銃、兵器の数は、枚挙できない。

今夜、私の知人、レスピオー中佐を訪問した。この度、パリ防衛という一つの事に極まった時には、仏全国の人民が馳集まり、必死に防戦するのは当然である。しかし、聞くところでは、この程、政府が度々命令し、集めた国民衛兵隊の中に、既に召集に応じ、その隊に加わりながら、この危機の迫るのを見て、密かにその家族を連れ、パリを去り、遠く田舎に逃れ

隠れる者が特に多いという。この連中は、全く国恩を忘れ、著しく義を知らない。国土が危急のときに、その軍隊に入りながら、市中から脱走し、隠れるという罪が軽くない。そこで、これらの者に対し、どう処置するかと問うた。中佐が答えて、これは、実にその通りである、政府は、当然その処置をするだろう。彼らが後日、戦争が終わり、再び帰ったときに、各自に2万フランずつの罰金を課し、これをこの度の防戦による死亡者や負傷者に与えるのが良いと思うとのことであった。

9月9日<sup>77</sup>

今朝、パリ城外の濠に水を注ぐため、市中の水路を一切閉鎖した<sup>78</sup>。

今般、政府が共和政に改めても、未だ仏全国の人心が従うか背くかわからないので、来る10月16日、国民議会議員を選出する。仏全国から議員を集め、共和制度か、立君政体かのいずれか、の可否を公的に問い、投票の多い方に制度を決めることにした。

パリ市中に発表の9月8日付国防政府令<sup>79</sup>。

仏国民へ

国防政府が宣言され、4日経ち、我らは、自らの任務を定めた。権力が地に伏した。陰謀に始まったことが脱走で終わった。我らは、無能の手から離れた舵を取り戻しただけである。欧州にそれが明らかである必要がある。欧州は、反論の余地のない証言により、国全体の我らへの支持を知る必要がある。侵略者がその途上で、降伏するより滅ぶことを決めたある大都市という障害だけでなく、どこでも、どんな苦難でも、不倒の、組織され、代表された市民全体、つまり、祖国の活きる魂を持つ、集団を見せる必要がある。そこで、国防政府は、次のとおり命令する。

- 1 国民議会構成員を選出するため、来る10月16日日曜日、選挙人集会を召集する。

---

<sup>77</sup> パリは、曇、午後雨。

<sup>78</sup> 漫遊記によれば、河川と堀の水位の差のため、水を注げなかった。

<sup>79</sup> 9日付官報。

2 この選挙は、1849年3月15日の法に基づき、候補者表に対し、行われる。

3 議会議員の数750名とする。

4 内務大臣がこの命令を執行する。

9月10日<sup>80</sup>

パリに発表の9月9日付国防政府令<sup>81</sup>。

1850年11月29日の法律第4条および1868年外交条約第21条により、次のとおり命令する。セイヌ県内の私的通信は、停止される。しかし、軍事供給品及び軍事設備に関するものは、例外である。パリ市内の私的電信業務は、継続される。電信線総局長が本命令を執行する。

9月11日<sup>82</sup>

パリ市内に発表の9月11日付国防政府令<sup>83</sup>。

現状では、政府がパリ市への物資供給の責任を負い、その物資の小売を消費者の利益に有害な投機目的にしない必要があることを考慮し、1791年7月19日から22日の法律第30条を参照し、農商務大臣の報告に基づき、次のとおり命令する。他に定めるまでパリ市内で肉屋の食肉の公定価格を復活する。その導入については農商務大臣命令で定める。農商務大臣が本命令を執行する。

パリ市内に発表の9月11日付国民衛兵に関する国防政府令<sup>84</sup>。

国民衛兵構成員である全市民は、パリ防衛に貢献するために召集され、その任務が義務であることと直ちにその任務を支える食料手配の必要もあることを考慮し、次のとおり命令する。必要とする者に与える食料券を、必要性を評価する担当の中隊毎、または郡の市毎に配布する。この目的のため、内務省内に、常駐国民衛兵隊の組織のための基金に組み入

<sup>80</sup> パリは、晴。この日、パリ市外の砲台近くの民家がすべて破砕されるのを見る。

<sup>81</sup> 10日付官報。

<sup>82</sup> パリは、晴。

<sup>83</sup> 12日付官報。

<sup>84</sup> 上記官報。

られる百万フランの基金を開設する。内務大臣が本命令を執行する。告示<sup>85</sup>。

深刻な事態が起きようとしているので、1864年8月22日ジュネーヴで署名され、全欧州諸国が批准した条約<sup>86</sup>中第5条の規定を思い起こすことが適切である。

負傷者を救おうとする参加国の住民は、尊重され、自由なままである。交戦国の将軍は、住民に人道に基づく要請とその結果生じる中立性を予め知らせる義務を負う。家で受け入れられ、手当てを受ける負傷者は、全て保護される。負傷者を自宅に受け入れた住民は、軍の宿泊と軍への協力金の一部の負担を免れる。

病院の他、負傷者を泊める家に立てられる目印の旗は、白地に赤い十字である<sup>87</sup>。この旗の立つところは、皆病院や負傷者の居場所で、戦争の外に置くことは欧州で普通の約束であるという。

伊国とローマの戦闘につき、新聞報道では、この度、両国間に一事件が起こり、互いに戦わざるを得なくなり、両国の兵が既にその国境で対陣した<sup>88</sup>。考えれば、伊国で有名な豪傑ガリバルディ将軍がこの機会に乗じ、近くに勢力を伸ばしたのだろう。また、このガリバルディ将軍は、以前から、長い間、立君政体を嫌い、共和制度を望んでいた。今回の仏国の変革を見て、これを支援するため仏国に来たという<sup>89</sup>。

9月12日<sup>90</sup>

---

85 上記官報。

86 戦場での傷病兵の状態の改善に関する第一次ジュネーヴ条約を指し、バーデン大公国、ベルギー、デンマーク、仏帝国、ヘッセン大公国、伊王国、オランダ王国、ポルトガル王国、普王国、スペイン王国、スイス連邦、ヴェルテンベルグ王国の12カ国が署名、12月にノルウェイ、スウェーデンが署名。

87 上記条約第7条に赤十字の旗をと腕章をつけることが規定されている。

88 9日付 *le Temps* がイタリアのローマ進軍の可能性を報じている。

89 13日付 *le Gaulois* が *le Progrès de Lyon* のガリバルディが義勇兵を率いて、サヴォワ県シャンペリに到着した旨の記事を引用している。

90 パリは、晴。

9月12日付農商務大臣令<sup>91</sup>。

農商務大臣は、国防政府が別に定めるまで、パリ市内での肉屋の食肉の公定価格の再導入を定めた、本年9月11日の命令の執行に当り、以下のとおり命令する。

- 1 本年9月12日からパリでの消費のため、肉屋への家畜販売の市場が毎日、馬肉市場で開かれる。
- 2 パリ市内の肉屋も首都での肉の商売を行うその他の者も自ら又は選択した仲買人により、その市場で必要な動物を買うことができる。
- 3 市場は毎朝8時に開き、販売は12時に終える。
- 4 買った動物の代金をこのために任命された出納係に払う。
- 5 買われた動物は、買主から、直ちに3か所の屠殺場に引き渡され、新たな命令のあるまで、その施設でのみ屠殺される。
- 6 9月12日から牛、牝牛、牡牛と羊が公定価格となる。
- 7 その価格は肉の種類毎に、8日間毎に、商農大臣が定め、前週の調達市場での平均販売価格、同期間の屠殺場からの引渡し of 正味の重さに従い、決められる。
- 8 牛肉の小売価格は、その肉片を次の3段階に分けて定める。  
第一類(腿肉、尻肉等)、第二類(脇腹等)、第三類(乳房等)  
切り離されたフィレ肉やフォーフィレ肉等は、公定価格の対象ではない。  
羊肉の価格も、同様に3段階に区別される。  
第一類(股肉等)、第二類(肩)、第三類(胸等)  
羊のカツレツは、公定価格の対象ではない。
- 9 売場に出された異なる種類と分類の肉は、掲示で示す。
- 10 獣肉に計量時に肉の落ちた骨を差し入れてはならない。  
骨を別売りし、値切られた価格とすることはできる。それは、そ

<sup>91</sup> 13日付官報。

の重さと価値による定価の設定に考慮される。

- 11 肉屋は、買手に選んだ肉の同じ分類の他の塊の他に別の種類や分類の肉を売ることはできない。
- 12 警視庁は、印刷、公表、掲示される本命令の実施を確保する監視手段を担当する。

肉屋はその店の最も見やすい場所に掲示する責任を負う。

今日、私はボンネー<sup>92</sup>校長に向い、今回のパリ籠城中、政府がその食料雑品を貯蓄する量を聞いた。

その答えは、

通常パリ市の人口2百万人とする。今回、籠城防戦の理由で市内を退去した婦女子や外国人の数を約80万人とする。残りが120万人である。またこの度諸地方や市から召集に応えた兵士等十万人を合わせて、その数が約130万人となる。今政府籠城中、用意の野菜、パンの類全て6か月分ある。また羊牛の貯えが2か月分、その数、牛4万頭、羊30万匹、これは、ただ2か月分であるが、なお、塩漬けにした羊牛肉の貯蔵がある。その量は、今分らない。

私がこのほどあちこち歩いていると、市内の畑や農園に牛羊を引き入れ、また、数か所に穀類を積み貯えているのを見た。

9月13日<sup>93</sup>

国民衛兵の閲兵式<sup>94</sup>があった。この度、防衛のため、各地から集まった国民衛兵隊を今日、総督トロシュウ将軍が巡回した。それで、国民衛兵隊は、全てパリ市中の大通りの左右に並列した。長さが約1里で、その銃剣は、まるで稲麻竹葦のようであった。

午後12時半、トロシュウ総督が来た。その先導は騎馬の数が数十。次にトロシュウ将軍、軍務大臣ル・フロー将軍、タミジェ将軍、その他数多くの士官が続き、遅れてまた数十騎の騎兵が続いた。このとき、私がトロ

<sup>92</sup> 原文のまま。

<sup>93</sup> パリは、曇。

<sup>94</sup> 13日付官報に予告。



シュウ将軍の服装を見たところ、その年齢はすでに長じ、その容貌は落ち着き、威厳のある態度が自ずから整っていた。傍の人にきくと、今年52歳であると。この大通りの左右に立ち並ぶ諸国民衛兵の前を、この総督が通り過ぎる時、各々その帽子をとり、礼をし、声をそろえ、総督の名を大声で呼んだ。このとき、総督は手を帽子にかけ、礼を返した。今日この巡見を受ける兵士は30余万人という。また、遊撃隊と称する国民衛兵が10万人いる。これはシャンゼリゼーという大通りに並列した。この2軍が合わせて40万人<sup>95</sup>である。今40万人の兵が立ち並ぶその長さは、道路1里を塞ぐという。また、偽りではない。

今日、コンコルド広場でゴニエー提督が国民衛兵隊を巡見したとき、第6大隊の小隊中に、勲章を胸の前にかけた兵士がいた。輝石をちりばめた銀の勲章である。つまり、西洋諸国では、功績ある将軍には帝王が勲章を賜り、これを胸の上にかける。提督が近寄り、この者を見ると、デュルユ元教育大臣<sup>96</sup>であった。提督が彼に向かい、貴殿は当然、この大隊の指揮官になるのが適切だろうといった。デュルユ氏が答えて、私は、歩兵であって当然である。その大隊を指揮する任務は、以前歩兵だった者こそがはるかに私たちより優れていると言った。提督は、ああ、近日また城郭の砦の上で再会しようと再び言った。デュルユ氏は、そのとおりだ、これが今日では我が仲間の任務である。当然、互いにその勇気を砦の壁の上に顕すはずだ、と言い、2人は、別れた。

スイス（仏独伊3大国にはさまれた一小国である）人のパリへの内々の援助<sup>97</sup>。

この度、パリ在住のスイス人が多数集った会合で「戦争中の救援のためのスイス協会」を組織した。この協会は、中立の原則に全く忠実に従い、火事の被害からの救援団を組織し、国際協会の救急車による負傷者の搬送

<sup>95</sup> 13日付 le Temps は、l'Électeur Libre の記事を引用し、パリ駐屯の軍・国民衛兵あわせ、18万から20万人としている。

<sup>96</sup> 1863年6月23日から1869年7月17日まで教育大臣。

<sup>97</sup> 14日付 le Temps 記載の加入申し込み手続きなどは省略。

を要塞内部で支援し、パリ住民に役立つことを目的とする。

この度、有志救援隊と称して、パリに在住する各国の人民の病院を設け、市内を救助する組織が作られた。パリ在住のアメリカ人の委員会は、1個のテント作りの病院を市内に建てた<sup>98</sup>。市内に在留する各国の国民の救助の様子は大体このようなものだ。

伊国の新聞<sup>99</sup>に、昨12日初めて伊軍兵士が、ローマ軍と戦闘した。その戦いは1時間でローマ軍は敗走し、伊軍は引き続いて進み、ローマに向かったという。

9月14日<sup>100</sup>

市中に本日付のパリ市の発表。

- 1 9月15日6時以降、パリ市内への出入りは、内務大臣発行の通行許可証がなければ、できない<sup>101</sup>。
- 2 この度、パリ周囲の要塞砲台の内部に、新たに1つ鉄道を建設した。これは戦争中、弾薬及び食料、諸装備を運送するためである<sup>102</sup>。

今日、両国の状態を推察すると、仏軍は、もはや途中での防御が難しい様子だ。兵士を各市に分け、配置し、これを守らせ、残る軍隊を全てパリの城に引き上げ、この要塞や砦の砲台により、防衛するというだけの戦術に決まった。そして普軍は、その行く手に一人の手向かう敵もなく、意のままに進入し、かつ要害の地を略奪すれば、パリ市城への攻撃が間近になろうとしている。

9月15日<sup>103</sup>

---

<sup>98</sup> 26日付 *le Siècle* 南北戦争中の連邦軍の病院をモデルにした。

<sup>99</sup> 15日付 *le Temps* 引用の13日付伊国官報記事によるチヴィタ・カステラナの出来事。

<sup>100</sup> パリは、曇、時々小雨。

<sup>101</sup> 13日付官報掲載の警視総監命令。しかし、15日付官報掲載のセイヌ県行政担当閣僚ジュール・フェリー名の発表文は、許可書不要の日の出から夕8時までの自由通行としている。

<sup>102</sup> 出典未確認。

<sup>103</sup> パリは、晴。

新聞を見ると特に変わったことはなかった。ただ、市内の人民は、上を見上げ、敵軍の迫るのを待つ様子があるのみである。

伊国の新聞にしきりにいう。伊軍が勝利に乗じ、既にローマ市内の市街に乱入し、伊国の旗を立てた<sup>104</sup>。明日はローマの城壁を攻めるだろうという。

私は、今夜、レスピオー歩兵中佐に近頃の世間の噂では、今回普軍がパリ城を囲むのに70万人の兵を出すという。今、貴方の考えは、どうかと聞いた。彼がいやそうではないと答えた。自分が心中計算すると、普国の人口が多くても、その男子で兵役につき、出陣した者は、約90万人だろう。そして、今日までの戦闘で既にその30万人が死傷した。残る兵が60万人である。今仏国境からパリまでの間に、6個の要塞、砦や砲台がある。これを囲み、諸鉄道の出入口を押えるのに約25万人の兵を使うだろう。するとパリの攻撃に向かう者は、30から35万人に過ぎまい<sup>105</sup>。

私がまた尋ねる。心中推計すると、以前聞いたことでは、普国の制度では常時全国の男子皆が兵役に服する。その人口もまた4千万人に近い。そこで、その兵役につく者が2百万人、少なくとも150万人はいるだろう。その上、今日の勢いは、仏国を圧倒し、その武力を凌ごうとする。彼らは仏国が強敵であることを当然知っている。そして、今その本陣に迫り、一度に雌雄を決しようとするれば、35万人の兵で足りると思うまい。なぜならば、このパリ城周囲に17か所の要塞がある。先ずこの要塞や砦を攻めた後、本陣を衝こうとするからだ。これが私の見方である。また攻撃する側は、どんな策略があるのか。貴方の見方がどうか。

彼が答えるには、私の意見もまた同じである。しかも普国人は、常に、我が国民を嘲り、罵り言う。パリ市民は、ただその衣食住を華美にし、心を喜ばせ、いつも歌や踊りを劇場で、聴き、観て、楽しんでいる。その意識が贅沢を望み、勇氣や強い力にない。そこで我が軍が一度立ち上がり、

<sup>104</sup> 17日付 le Gaulois 掲載のアヴァス通信のフィレンツェ発報道。

<sup>105</sup> 16日付 le Figaro は、北独同盟の在仏兵力を約110万人、これまでの損失40万人、メッス、ストラスブール等への配備40万人、パリ攻撃用に30万人以上とする推計を紹介する。

パリに向け数門の巨砲が数軒の家屋を焼き砕くのを見れば、必ず直ちに恐怖し、散り散りになると言える。大体これが彼らの意識である。理解できるだろう。

私が以前、英国にいたときに見聞したが、英国人が仏国を罵るのは、非常に酷い。私がまた仏国に入ると、仏国人は常に英国を嘲る。また同じである。今また聞く、普国人が、長い間仏国を罵ることも、この通りだ。思うに、接する隣国同士の仲が良くないのは、世界で同じ事情だ。しかし、また、内心想うが、このレスピオー氏の説、ただその民衆庶民の状態を見て、その軍中の勇士の気持ちを察する者に似ている。普軍中には、当然英傑がいる。また、20年来の欧州の人材と呼ばれるビスマルク氏のような人物は、その心中の策略として、一時の軽はずみな行動に出る訳がない。このことから私は内心、今回の仏軍の敗戦が常に敵を侮り、軽蔑したことによると自分なりに解釈する。

9月16日<sup>106</sup>

昨日来、地方から普軍が次々に進入、もうパリの近郊に乱入し、諸方面の鉄道線路を全て破壊したと通報がある。この2、3日仏国中で、所々小さな戦いの数えきれない報道があった。

---

<sup>106</sup>パリは、晴。漫遊日誌に以下の記載（現代語訳化した）がある。

今日午後、パリ王城に行き、その様子を見ると、城中周囲の庭園内に数百台の大砲、数百台の弾丸、火薬を積んだ車が連なって並び、数百頭の馬が園内に満ちて繋かれ、園内が兵隊の集結場所になっていた。平素は、この庭園は掃除、灌水が行き届いていたところである。中に広い散策場所があり、老若男女、児童が悠々と散歩するのを許していた。この密生している園内に塵芥を見ないのが常であった。しかし、今日外側から眺めると、菰藁を敷き連ね、汚れ乱れた様は、まさに軍中の形を表している。この園内には、世界のあらゆる宝草、万国の奇花を集め、寒暑の季節でも、千草万花その色を争い、その香を競う。花、葉、蔓が満ちる秋には、あらゆる草花がその色を尽くして咲き乱れ、その姿が目を見せつけた。しかし、今日は、その主である帝王は、去って、敵地の虜となり、親族も四散し、城中は空で、園内に満ちているものはただ、兵器だけである。誰がかつて、この草花を楽しみ、その艶やかな香りを袖を翻して留めようとしたのだろうか。時の変化や機運の転換を感じるのみである。誰がために、咲き並ぶかも、白草の、詠めばありし、むかしなりせば。

私が今日、英国の新聞を見ると、今もし、英国が仏普両国の和平を計れば、以前に普国の新聞に出たように、そのときは普国が境界上の2地方、50億フランの賠償金と仏海軍の半分を望むだろうという<sup>107</sup>。英世論は、仏国の領土を分け、普国に与えることに反対しないとしても、その海軍を分け与えることは大いに避けたいという。なぜならば、普国が強い武力をその近隣の国に奮うといっても、幸いに海軍がない。今これに仏国の海軍を分ければ、実に虎や豹に羽がついたように、その爪や蹴脚が遠く英国まで及ぶことを、深く恐れるという。

伊国の新聞に、昨15日伊軍、ローマと戦い、互いに騎兵での戦闘があった。ローマ軍は戦死3名、負傷者3名、伊軍も戦死1名、負傷者3名とある<sup>108</sup>。

仏国が講和を計るため、ティエール氏という1人の閣僚が命令により、今日、英、露、墺、伊の4か国に交渉に出発した<sup>109</sup>。その趣旨がまだはっきりしない。このティエール氏は、ナポレオンが帝座に上る以前1840年頃、仏王ルイ・フィリップの首相であった。この人が在職中、命じて、パリ周囲の要塞、砲台及び城郭外の16要塞を新たに造営させ、その工事に5か年前後かかった。すなわち実に、今を去る30年である。

この度、仏国の政治体制が一変し、共和制度となり、王宮内の諸宮殿、建物及び宮外の諸施設、建物の前面に「自由・平等・博愛」の文字を示させた<sup>110</sup>。

9月17日<sup>111</sup>

9月17日付不在税の国防政府令<sup>112</sup>。

---

<sup>107</sup> 16日付 le Gaulois は、Morning Post の50億フランの賠償金、仏海軍の半分の譲渡、普軍のパリ入城、講和条約のパリでの書名を条件に挙げ、最初の2条件は、仏国が受け入れやすいとしている。

<sup>108</sup> 出典未確認。

<sup>109</sup> 12日付官報。出発は12日夕方としている。

<sup>110</sup> 26日付官報に国璽等に「自由、平等、博愛」の文字を刻むようにとの国防政府命令が掲載されている。

<sup>111</sup> パリは、晴。

<sup>112</sup> 19日付官報。

多くの居住者がパリを離れ、戒厳令による負担を免れることは正しくないと考え、次のとおり命令する（9月10日<sup>113</sup>、国民衛兵隊を市内に召集した。しかし、密かに脱走し、その危急を逃れる者が甚だ多かった。そこで、この令を下したものだろう<sup>114</sup>）。

9月10日以後、公用以外で、パリを離れた者の部屋には、その部屋の賃料の額に応じ、次の税金を課す。賃料1か年600フラン以下の部屋には、この税を課さない（この600フランは、我が国の金貨で約120両である。パリで1か年賃料600フラン以下の部屋が特に小部屋であり、最も貧しい者の住まいであるからである<sup>115</sup>）。

600フラン以上の部屋への税金は、次のとおり。600フラン以上1,000フランまでが月20フラン、1,001フラン以上2,000フランまでが月60フラン、2,001フラン以上3,500フランまでが月120フラン、3,501フラン以上6,000フランまでが月180フラン、6,001フラン以上10,000フランまでが月240フラン10,001フラン以上20,000フランまでが月300フラン、20,001フラン以上が月500フラン。本税は、パリ市の戒厳令解除で終わる。この税の役割は、パリ市庁に任命された委員会の提案に基づき、パリ市長が命令で定める。月額税は、月1回に限り通知後15日の間に納める。本税に対する不服は、上記15日以内に提出されねばならず、上記の委員会の意見により、パリ市長が判断する。パリ市長がこの命令を執行する。

私が以前、パリ市民への家屋税の課税の仕方を聞いたところ、その住民は、借家が殊に多く、その家屋税は、その貸借料に応じて決める。当然その市内の繁盛するところと縁辺部とは、その事情が異なる。その方法は、大体家賃1,000フラン以下の家で1か年の税金が百フランにつき3フラン（仏貨の百フランが我が国の20両、5フランが我が国の1両に当たる）、1,000フラン以上の家で百フランにつき4フラン、5,000フラン以上の家で百フラ

---

<sup>113</sup> 11日の誤りと思われる。

<sup>114</sup> 正元の意見である。

<sup>115</sup> 正元の意見である。

ンにつき8フラン、1万フラン以上で百フランにつき13フラン、2万フラン以上で百フランにつき17フラン、これがその概略である。そこで、パリ住民で家賃500フランの家に住む者は、毎年15フランを税金として政府に納める。そして、これを下位の住民とする。今、600フラン以上の家賃の家に住む者から、上記の税金を出させる。

9月18日<sup>116</sup>

パリ市籠城。

9月16日付国防政府令<sup>117</sup>。

閣僚グレ・ビゾワンと海軍大臣フーリション提督がトゥールに赴き、国璽尚書とともに、敵の非占領地域で政府権力を行使する国防政府派遣部<sup>118</sup>を組織する。この権限が首都の包囲期間、続く。

今日、独軍徐々に進入し、パリ城外要塞の近く陣をとったとの通報<sup>119</sup>があった。

今日からパリの全ての道の出入りを禁止し、籠城した。諸鉄道網は、既に全て断ち切られていた<sup>120</sup>。

北部鉄道会社が社員から1,400名の武装消防隊を編成した<sup>121</sup>。

パリ郊外ヴィルジュイフの要塞外で国民衛兵ヴィニョーがバイエルンの士官を殺し、その兜と剣を奪い、仲間皆が羨ましがる栄光の戦利品にした。また、仏遊動国民衛兵第8大隊に属する第9中隊のラヴィニュー大尉は、バイエルン龍騎兵4名を殺し、1名を捕虜にし、連れて帰った。これを今日

<sup>116</sup> パリは、曇。漫遊日誌に普軍と仏軍の兵力の以下の推定がある。

普総兵力 150 万人(内訳 死傷捕虜 35 万人、国内残留 15 万人、仏侵入 100 万人(内訳 7 要塞包囲 40 万人、地方 10 万人、パリ包囲 50 万人))。

仏総兵 100 万人(内訳 死傷捕虜 45 万人、他国・植民地 5 万人、7 要塞籠城 25 万人、パリ内外守備 25 万人)、パリ守備国民衛兵 30 万人、パリ守備兵計 55 万人。

<sup>117</sup> 17 日付官報。なお、トゥールに派遣部を置く 12 日付国防政府命令は、13 日付官報に掲載。

<sup>118</sup> 「トゥール派遣部」という。

<sup>119</sup> 18 日付 le Gaulois の報道等。

<sup>120</sup> 20 日付 le Gaulois は、モンパルナスからの西部線を除く全線とする。

<sup>121</sup> 20 日付 le Temps

の美談として新聞が書いた<sup>122</sup>。

今日、私がパリの諸方面の砲台運営を巡見したが、防御の方法は、大いに整った。城外の様子は、城門の出入ができず、見えなかった。

9月19日<sup>123</sup>

本日、普軍がパリ市城の東南のヴィルジュイフやヴィトリー付近で目撃された。17日には、ショワジー・ル・ロワ付近のヴィノワ將軍の作戦では、仏兵戦死16名、負傷者37名の損害があり、普兵の損害は、戦死58名を含む死傷者約400名と報告があった<sup>124</sup>。

昨日仏政府のファーヴル外務大臣、交渉のため、モーにある普王の司令部に行き、ピスマルク首相の許に到着し、今なお滞在していると知らせがあった<sup>125</sup>。これは即ち、和平の会談だろう。

仏諸県や市町村が決議した国防協力の補助金<sup>126</sup>。

諸県と町村名と金額、県として、イレ・ヴィレーン (150万フラン)、ロワール・アンフェリュール (50万フラン)、サルト (250万フラン)、市町村として、アンジェ (20万フラン) アングレーム (10万フラン)、ブザンソン (1万フラン)、ボルドー (150万フラン) (貸付金)、クレルモン・フェラン (10万フラン) (貸付金)、コニャック (20万フラン)、リール (150万フラン)、リヨン (6万フラン)、マルセイユ (50万フラン)、ナント (50万フラン)、ニオール (25万フラン) (貸付金)、サン・ナゼール (5万フラン)、トゥールーズ (150万フラン) (貸付金)、総計1,106万フランである。

9月20日<sup>127</sup>

ファーヴル外務大臣、まだ普国の司令部に滞在し、戻っていない。そこで、人々はその様子が分からない<sup>128</sup>。

---

<sup>122</sup> 22日付 le Gaulois

<sup>123</sup> パリは、晴。

<sup>124</sup> 20日付官報。

<sup>125</sup> 21日付 le Figaro

<sup>126</sup> 19日付官報。

<sup>127</sup> パリは、晴。

<sup>128</sup> 21日付 le Gaulois



昨日は、終日、城外要塞で砲戦の音が聞こえた。

去る18日、パリ市民15歳以上18歳までの者500人、隊を組み、防戦の人員に参加したいと志願したと新聞中に書いてあった<sup>129</sup>。

今日、私は、ある仏国人を訪問し、目下の攻守両軍の兵の優劣と利害得失を評価したが、その国の人間であれば、人情として、自軍の都合のよいことを挙げて、敵の過失を数える。その論評が必ずしも公平にはならない。そのため、その議論を止め、退去した。

宿に帰り、内心、今日の攻守両軍の数の多少、優劣を推計する<sup>130</sup>と、仏国の海陸の精兵を百万人とする。その内訳が死傷者や捕虜40万人、海軍また国外に在留の兵10万人、パリ市外にある7城の籠城兵25万人（これは、パリ市本陣の城から独国境までの間にある7要塞に籠る兵である）等であり、75万人の兵が既にパリの防衛に関わらない。その結果、パリ城内外の守備兵は、25万人となる（内15万人は、海陸の精兵、10万人は、諸地方や市からの国民衛兵）。この25万人の兵は城外にある17の要塞を防御し、その他に陣を布く戦隊である。また、パリの国民衛兵の数約40万人と記録される。しかし、この市内の兵は、防戦の勇氣に乏しく、本当に戦いに臨み、死のうとする者は、非常に少ない。加えて、銃が足りない。そこで先ず、絞って25万人と数えた。そうするとパリ城外の17城とパリ本陣の城等を守る精兵と国民衛兵を合わせても、その数がせいぜい50万人を超えないと推計する。

普軍の精兵は150万人であるが、その内訳が死傷者捕虜35万人、その国境にいる兵10万人、仏国内7市の籠城を囲む兵40万人、また仏国リヨン以北にある兵10万人、パリ城を囲む兵55万人となり、考えれば、今フランスの国内に侵入し、あちこちに布陣する兵が100万人余りとなる。私の見積りは、このようであるが、人を頼み、敵味方の兵数を詳しく調査できない。

<sup>129</sup> 22日付 le Siècle には、同日、シャン・ド・マルスで、15歳から18歳までの少年の隊の編成と隊長選考を行う旨の記事が掲載されている。

<sup>130</sup> この推計は、前記漫遊日誌18日記載の推計よりも控えめになっている。

9月21日<sup>131</sup>

市中への9月20日付閣僚一同の宣言<sup>132</sup>

国防政府がその基礎とする名誉と危険の伴う地位によって立つ政策を変えようと考えているとの雑音が撒き散らされている。この政策は、次の言葉で表される。

我らが領土の僅かな土地も、我らが要塞の石1つも譲らない。

政府は、最後まで、この政策を変えない。

昨20日、前線の陣地から報せてきた普軍の陣地は、モーに普王の本陣。フォンテンブローに普太子の本陣。ブリュノワにアルプレヒト王の本陣。ブゾンにザクセン王太子の陣地。ショワジー・ル・ロワに、フォーゲル・フォン・ファルケンシュタイン将軍の陣。これは皆、パリ城郭外の要塞の周囲にある。

今日、パリ周辺の諸要塞や陣地から、敵兵が追々進入布陣する旨の報告が多い<sup>133</sup>が、別に珍しくはないので、ここでは省略する。

今日からパリ市内、食料の牛乳が一切なくなった。そして諸物価がいつもの3倍に上がった。貧しい者の困窮切迫が理解できる。

9月22日<sup>134</sup>

国防政府発表<sup>135</sup>。

ファーヴル外務大臣は、パリ包囲の始まる前、これまで沈黙を守っていた普軍の意図を知ろうとした。我らは、王朝の利益のみで始められた戦争と非難するドイツに対する憎しみが無いので、野蛮な戦争を止めよ、衡平な条件を受け入れる、少しの領土も要塞の小石も譲らないと宣言した。普国が冒頭、征服の権利として、アルザスとロレーヌを保持すると述べ、人民に相談する意思はなく、彼らを烏合の衆として扱おうとした。

---

<sup>131</sup> パリは、晴。

<sup>132</sup> 21日付官報。

<sup>133</sup> 20日付官報に、諸要塞からの報告が掲載されている。

<sup>134</sup> パリは、晴。

<sup>135</sup> 22日付官報。

確定的な権力を決め、平和か戦争かを投票する議会の召集につき、休戦の前提条件として、包囲した場所、モン・ヴァレリアン要塞とストラスブルグ兵營の占領を担保として要求した。

敵は正体を現し、我らは、義務と不名誉の選択を迫られた。我らの選択は決った。パリは最後まで抵抗する。地方の諸県は救援するだろうし、神のご加護により仏国は救われよう。

外務大臣は、普軍総司令部訪問の詳細報告の作成に忙しい<sup>136</sup>。

今日、普諸將軍の陣地司令部、フェリエール・アン・ブリ<sup>137</sup>に普王の本陣。ブリュノワにアルプレヒト王子の陣。フォンテンブローに普王太子の陣。ブゾンにザクセン侯の陣。ショワジー・ル・ロワにフォージェル・フォン・ファルケンシュタイン將軍の陣。

今日、新聞中に、昨日、ロメンヴィル要塞の脇で戦闘があった。普兵3百人を虜にして、パリに輸送したと記録する<sup>138</sup>。その他は別に変わったことがない。

9月23日<sup>139</sup>

この明け方3時より城郭外ロメンヴィルとヴィルジュイフの2要塞の城外で戦闘が始まり、午後1時頃まで絶え間なく、激烈な砲声を聞いた。夕刻になってもなお砲声が時々聞こえた。

今日からパリ市内、食料の獣肉の値段が平常時の10倍である。農商務大臣が獣肉の小売の公定価格の変更を命令<sup>140</sup>した。パリ市庁がパンの公定価格を8日毎に委員会で決定するよう命令した<sup>141</sup>、

一昨日のビスマルク普首相とファーヴル仏外相の休戦交渉<sup>142</sup>。

ビスマルク普首相が言う。仏国は、以前から独国と戦い、その地を掠め

<sup>136</sup> 22日付官報。

<sup>137</sup> ロチルド(英語ではロスチャイルド)の館がある。

<sup>138</sup> 出典未確認。

<sup>139</sup> パリは、晴。

<sup>140</sup> 22日付官報。

<sup>141</sup> 24日付官報掲載の22日付命令。

<sup>142</sup> 23日付官報掲載のファーヴル外務大臣の報告からの抜書きである。

ようとし、ルイ14世からナポレオン3世に至るまでその方針を変えなかった（仏王ルイ14世の在位中、1667年、ライン河沿いの2地方を奪い、永く仏領地とした<sup>143</sup>）。独国の安全保障を確保する土地を守ることが必要である。ストラスブル（仏独境界上にある一つの大要塞である<sup>144</sup>）が独国玄関の鍵であり、私がそれを実現しなければならない。さらに、パ・ランとオ・ラン両県とメッスなどを含むモゼル県の一部も不可欠で、放棄できない。講和条約を交渉できる確実な権限を持つ政府を選出する議会開催のための休戦を私も望むが、担保として、パリでの議会開催であれば、ストラスブルなどの都市と例えば、モン・ヴァレリアン要塞の占領、トゥールでの議会開催であってもストラスブルの占領の約束をすることが必要である。

ファーヴル外務大臣は、自分がここに来たのは間違いであったが、ビスマルク首相とのやり取りは国防政府の同僚閣僚に伝え、その返事を改めて伝える旨答え、パリに戻ってから、遺憾ながら貴下の提案は受け入れられず、仏国が、全力を挙げ、抗戦する旨のビスマルク宛返答し、これら経緯の報告書を国防政府に送った。

今日、両国の威風、優劣が既になくなった。普軍の威勢が日々増し、仏軍の威勢が日々減る。その様子が分る。

今度、仏国諸兵学校の生徒を全て少尉に任官した<sup>145</sup>。

9月24日<sup>146</sup>

昨朝、パリで、書簡を送るため政府が第1号の小気球を上げた<sup>147</sup>。これは、現在パリ籠城中、四方の鉄道線路が全て断絶し、書簡の往復ができず、郵

<sup>143</sup> 正元の注である。

<sup>144</sup> 正元の注である。

<sup>145</sup> 22日付官報。今回は、ポリテクニク（軍務省傘下の理工学大学校）が対象で、既に、8月の軍特別学校の生徒に同じ扱いがなされた。ただし、在学中の生徒は、そのまま任官され、少尉の位を示す肩章などをつける。

<sup>146</sup> パリは、晴。

<sup>147</sup> 25日付 le Gaulois。ネプチューン号で、郵便物等を運搬し、104km離れた、ユール県ル・ヴィエイユ・エヴルー市のクラクーヴィル城公園に到達した。

便に使うためという。今朝、ヴェルサイユ（パリの隣の市）の普軍中から1つの気球を上げた。これは、パリから出した気球を追うためという。しかし、人はその意味が分からない<sup>148</sup>。

昨日、政府の会合で、パリの諸道の門を今日から閉鎖することを論議したが、トロシュウ大統領がこれを拒み、終日通行を許した。夜中、跳ね橋を全て引き上げておくようにという命令があった<sup>149</sup>。

9月25日<sup>150</sup>

最近、大戦争がなく、対陣しているだけで、書き残すことがない。

今日の昼11時、第2号の気球<sup>151</sup>を上げた。これもまた、パリ市中から書簡を送達するためである<sup>152</sup>。

この頃、行動している兵隊の中に3、5人の婦女が混ざる。その服装が兵隊と同じ衣服を着て、腰に袴のようなものをまとい、その腰の部分覆い、そして金属で作った小さな樽のようなものを肩にかけ、兵隊とともに行動するのを見る。何者なのかと問うと、仏語ではこれを、カンティニエール（酒保女の意味）と言い、ある場合は、陣中の兵士に酒や焼酎の類を売る者だという。これは皆、将軍以下の軍人の娘及び兵士の妻子だという。

9月26日<sup>153</sup>

先頃、欧州4大国に派遣され、英国から戻った仏政府ティエール大臣が今日、トゥールの仏派遣部から露国のサンクト・ペテルブルクに発ったという。この使節は、欧州中の英、露、墺、伊4大強国各国の意見を聴き、両国和平の斡旋を頼むためと思われる。

今朝10時頃、パリ市内ヴァノー通りに、1気球が降り、直ぐ警衛の国民衛兵がこれを、政府に送った。これは、つまり、仏国の諸県から書簡をパ

<sup>148</sup> 気球は風に流されるので、追いかけて捕まえるのは難しい。

<sup>149</sup> 出典未確認。

<sup>150</sup> パリは、晴。夜明けが4時半、日没が午後6時。

<sup>151</sup> 26日付 le Temps フィレンツエ市号で、伝書鳩も初めて積み、30km離れたイヴリン県のヴェルヌイユに到達した。

<sup>152</sup> 27日付 Le Gaulois

<sup>153</sup> パリは、晴。

りに送達する気球だという。

今日、私がパリ市西部の砲台を巡見すると、その門内の街角に石を積み、第2の外壁を作っていた。

9月26日付郵便に関する国防政府令<sup>154</sup>

郵便局は、仏国内、アルジェリアと外国宛の通常の手紙を気球で送ることができる。気球で送られる手紙の重量が4グラム（我が国での1匁7厘2毛である<sup>155</sup>）を超えてはいけない。この手紙の郵送料を20サンチームと定める。財務大臣が本命令を執行する。

（巻の2完）<sup>156</sup>

---

<sup>154</sup> 27日付官報。

<sup>155</sup> 正元の注である。

<sup>156</sup> 本稿では、著者渡正元の原文に即し、現代語訳を進めた結果、現在では、差別表現と受け止められる可能性のある表現が残る可能性があるが、それは原著者も訳者も意図しないことである。